【登場人物表】

鈴木翔太（30）主人公

鈴木美咲（30）妻・イラストレーター

三好りの（24）携帯ショップ店員

白川すみれ（23）職場の後輩・不倫相手

警察官

成田金太郎　実業家

アナウンサー

記者

刑事

美咲の母

美術館の客

タクシー運転手

○鈴木家（朝）

自然豊かな山際の農家。元々は農業用の家だったがリノベーションされている。周囲に家はなく広々としている。

鈴木翔太（ＳＳ）、洗面台で髭を剃っている。

翔太の声「ニーチェは言った。結婚するときは自分自身に問いかけてみよ。年老いた自分がこの人と会話できるのだと信じられるかどうか。結婚におけるその他のすべては移ろい変わりやすいものにすぎない」

鈴木美咲（ＳＳ）の声「ヤマトイモってバナナの味がする」

ダイニングテーブルの上にはスマホと財布がセットになって２組置かれている。それぞれ翔太、美咲のもの。

ダイニングの壁にはなにもかざられていない。

翔太「ヤマトイモってとろろ？」

翔太、髭を剃る手を止めない。

美咲の声「そう。……コンビニのとろろってヤマトイモ？コンビニのとろろはバナナの味なんてしないのに」

井に山盛りに入っているとろろ。

美咲の声「これはバナナの味がする」

翔太、顔を洗って洗面台から顔を出す。

翔太「バナナ味のとろろだったんじゃないの？」

翔太、返事がないので洗面所からダイニングに向かう。

机の上に置かれた山盛りのとろろの入った丼。テーブルに置かれた財布とスマホのセットが１つになっている。翔太、辺りを見渡すが美咲の姿は見えない。

翔太「朝から自分ですったの？このとろろ？」

誰も応えない。ダイニング、寝室、風呂、トイレ、どこにも美咲はいない。

翔太、玄関から顔を出すが美咲はいな

い。翔太、テーブルの上のスマホと財布を手に取って眺める。

○鈴木家

翔太、玄関先に座っている。警察官を待っている。警察官、自転車に乗ってやってくる。

翔太、警察官の姿が見えると立ち上がってお辞儀する。警察官、自転車を止めて近づいてくる。

警察官「お待たせしました。どうされましたか？」

翔太「妻がいなくなってしまって」

警察官「いつごろ？」

翔太「今朝です。ついさっき」

警察官、顔をしかめる。

警察官「さっき？３時間も経ってない？」

翔太「そうです」

警察官「それはちょっと、はやいですね」

翔太「けど、急にいなくなったんです」

警察官「そうですね……。どこかにお出かけになっているとかは、考えられませんか？」

翔太「……ないと思います」

警察官「他に事故にあったとか、攫われたみたいな事件に巻き込まれてしまったとか」

翔太「その可能性はあるかないかで言ったらあると思います」

警察官「……もう少し様子を見られては？」

翔太「……けど、いないのです」

警察官「ちょっと遊びに出かけている可能性も同じくらいありますよね？」

翔太「それはそうなんですが」

警察官「どうしていなくなったと思われるのですか？警察の手を借りないといけないくらいに」

翔太「とろろの話をしていたのです」

警察官「とろろ？そばにのせる？」

翔太「はい。とろろがバナナの味がするって。この話の途中でいなくなるなんておかしい

ですよね」

警察官「えーっと、奥さんも少し変わった方で？たまにふらっと旅行に行っちゃうタイプとかではないですか？」

翔太「そうかもしれないです」

警察官「やっぱりですね。私の夫もそういうタイプなので。夫はすぐに帰ってきますけど」

翔太「それはつまり、様子を見ようって話で終わるってことですか？」

警察官「話が早い。そうですね。我々としても事件とかじゃないとあんまり動き回る時間じゃないというか。家のなかが荒らされているわけじゃないですよね？」

翔太「ええ。なにもなくなっていません」

警察官「奥さんは手ぶらで？」

翔太「いえ。スマホと財布を持っていっています」

警察官、気楽な雰囲気になる。

警察官「よかった。なら一安心ですね」

翔太「それが、僕のスマホと財布を持っているのです」

警察官「あなたの？」

翔太「はい。妻のものは机の上にあります」

テーブルに置かれた一組のスマホと財布。

翔太「だから、妻に連絡しようにもできないし。ほら、スマホにロックがかかっていて。妻から連絡が来ているのかもわからないし。僕もスマホがないから調べようもないし」

警察官「１１０番は？」

翔太「緊急通報はできたので、ひとまず」

警察官「ひとまず……。ご不安なのはわかりますが、もう少し待ってみては？ここは田舎ですし、あまり話を大きくしすぎてしまっても後々ね。ひょっこり戻って来るかもしれませんし」

翔太「……わかりました」

警察官「ご主人もきっと戻ってくるってお思いなのでは？」

翔太「ええっと、それは」
警察官「申し訳ないですが、またなにかありましたらご連絡ください。それでは」
翔太、警察官をお辞儀して見送る。

冷蔵庫に入れられたラップしたとろろの丼

○携帯ショップ
幹線道路。その道沿いにある元玩具屋みたいな携帯ショップ。店内は老人でいっぱい。
翔太、カウンターに座って店員を待っている。
店内には大きなテレビが置かれていて情報番組が流れている。画面のテロップには”ひまわり泥棒　白昼堂々の犯行”の文字。
三好りの（24）の声「お待たせいたしました」
マニュアルの挟まったクリップボードを持ったりのが入ってくる。りの、カウンター越しに翔太の前に座る。
翔太、会釈する。りの、笑顔で返す。
りの「本日はどうされましたか？」
翔太「妻がいなくなりまして」
りの、困ってマニュアルをめくる。りの、恐る恐る尋ねる。
りの「警察に行かれたほうがいいのでは？」
翔太「ああ、もう相談はしてて。携帯を探してほしくて」
りの「奥様のですか？」
翔太「いや、妻の携帯はここにあって」
カウンターに置かれるスマホ。
翔太「僕のを探してほしいのです。あ、それと妻のスマホのロックを解除できますか？」
りの、理解が追いついていない間がある。
りの「えーっと、すみません。順番に確認さ

せてください」

翔太「どうぞ」

りの「奥様が行方不明になられている」

翔太「はい」

りの「お客様のスマホはなくなっている」

翔太「はい。たぶん妻が持っていったんだと思います」

りの「えーっと、新しい情報だ。なんだっけ。奥様のスマホはお客様が持っている」

翔太「そうです」

りの「順番に行くと。まずここでできるのはお客様のスマホを探すことですね。最後に使った場所がわかります。あともし電源が入っていればそれで場所もわかります。奥様のスマホのロックは解除できかねます。本人だったり委託状があればできるのですが」

翔太「妻の居場所は？」

りの「……もしお客様のスマホを持ち歩いていてさっきの条件を満たしているのであればわかりますね」

翔太「ありがとうございます。……あと、新しいスマホを契約したいです。なにをするにも不便で」

りの「かしこまりました。それではまずお客様のスマホを探してから契約に移らせていただきますね。準備しますのでこちら、ご記入になってお待ちください」。

りの、クリップボードを翔太に渡す。

翔太、書き始める。りの、立ち上がってバックヤードへ。

大きなテレビでは”ひまわり泥棒”のニュースが流れている。絵画のゴッホのひまわりが映される。翔太、書き終わってそのニュースを眺めている。

りの、戻ってきて座る。翔太の視線がテレビに向いていることに気がついて声をかける。

りの「おしゃれですよね。ひまわり泥棒」

翔太「おしゃれ？」

りの「だって、盗んだ絵の代わりに本物のひまわりが花瓶に生けられてたって」

翔太「詳しいのですね」

りの「まぁ、ずっとその話題でテレビは持ち切りですから。ここにいたら嫌でも目にはいるので。……ご記入ありがとうございます。もう少しだけお待ちください」

りの、ボードを持って離席する。

テレビには絵の所有者だった成田金太郎が映っている。ワイドショーに出演しながらアナウンサーの質問に答えている。

りの、戻ってくる。目の前に座る。今までもよりもフランクにカウンターに身を乗り出している。

りの「あの人が買って家に飾るための警備を整えている間に預けていた銀行で盗まれたらしいですよ。幻のひまわり」

翔太「幻の？」

りの「最近、見つかった新しいゴッホのひまわり。３００億円で買ったって。わけわからないですよ。３００億円って」

翔太、りのを見る。りの、気がついたように姿勢を正す。

りの「それで、お客様のスマホなんですが」

りの、印刷された地図を差し出してくる。地図には家が青い丸で囲まれている。

りの「この辺りにあると思われるのですが、これって今お住まいのご住所です。それでこの時刻が今日の６時くらいなので……」

翔太「その時間にスマホを触ったのはおそらく僕です」

りの「その後の場所はこちらでわからず……お力になれず、申し訳ございません」

翔太「いえ、いろいろわかったので」

りの「いろいろ？」

翔太「ああ、はい。妻はちゃんといなくなろうとしていなくなってるんだなって」

りの「だといいです」

翔太「いい？」

りの「すみません。ほら、事件とか事故だったら最悪でしょうし。自分の意志で行きたいところに行けたのなら、それは最悪よりはいいかなって」

翔太「……そうですね」

りの「ゴッホは好きですか？」

翔太「？ゴッホですか」

りの「はい。ほら、ひまわりの。ゴッホが好きすぎて絵を盗んでいる人もいるくらいですから。ふらっとどこかに行ってしまうなんていくらでもありそうじゃないですか？犯人は絵を盗みたくなるくらいゴッホのこと好きだったのじゃないですか？奥様にもきっとそういうなにか衝動的ななにかが胸の奥には存在していたのではないですか？」

翔太「たぶん違うと思います……妻にそういう衝動的ななにかがあったかと言われると……」

りの「私もです。ゴッホはちょっと気狂いすぎます」

翔太「私もです？」

りの「はい。ゴッホはかなり気狂いだと思います」

翔太「ゴッホ？気狂い？」

りの「完全に向こう側にいってしまった人の絵って葛藤がなくて好きになれません。それならモネのほうがずっと好きです」

翔太「すみません。急に何の話をされているのか」

りの「ごめんなさい。絵の話をしてるんだと思ってたから。気が紛れればいいかなって」

翔太「……あんまりよくわからないですが、僕もどちらかと言えばモネのほうが好きです」

りの「私たち、気が合いますね」

　りの、翔太を見て頷いている。

翔太「……あの」

りの、仕事用のモードになって翔太に説明をはじめる。

りの「失礼しました。それでは、新しい契約についてなのですが」

翔太、りのから書面で説明を受けている。

テレビには貸金庫の中央に置かれた花瓶に生けられたひまわりの写真が写されている。

○鈴木家（昼）

縁側。レースのカーテンが風に揺れている。

ダイニング。テーブルの上には美咲のスマホ、翔太の財布が置かれている。

ダイニングの壁にはなにもかざられていない。

翔太の声「もしそちらに顔を出したら、連絡ください。はい。……ええ。心配ですから。よくあると言っても初めてですから。おかあさんはそうかもしれませんが。ええ。まぁ。そうですね。そう考えるようにはしてみます。おとうさんまで。わかりました。それでは。はい。失礼します」

翔太、美咲の部屋の中に立っている。

新しいスマホをポケットにしまう。

美咲の机にはデジタルで絵を描く仕事に必要なものがそろっている。ＰＣやタブレット。壁にはプリントアウトされた二次元の美少女や美少年の絵が貼ってある。机から少し離れた壁際には油絵が立てかけられるようにしておかれている。油絵は風景画や静物画、人物画なと様々。ひまわり畑を連想させるモチーフや色使い。

翔太、美咲の机に座って部屋のなかを見渡す。

翔太、美咲のＰＣの電源をいれる。立ち上がっていく画面。しばらく眺めている。パスワードを求められるがわか

らない。パスワードを忘れた人のための画面。秘密の質問を聞かれる。“心残り”

翔太、ため息をつく。

翔太「心残り……」

翔太、ＰＣになにかを打ち込もうとしてやめる。

冷蔵庫に入ったとろろの器。

○鈴木家（夜）

ダイニングのライトだけがついている。

テーブルの上には、新しいスマホと美咲のスマホ、翔太の財布が置かれている。

ダイニングの壁にはなにもかざられていない。

翔太、椅子の座って天井を見上げている。

インターホンのチャイムがなる。

翔太、無視するがしつこくなる。立ち上がってダイニングから出ていく。

翔太の声「ちょっと、勝手に上がらないでください」

りのの声「お邪魔しまーす」

私服姿のりのがダイニングに入ってくる。

りの「おしゃれなとこ～」

翔太「なに勝手に入って来てるんですか。出て行ってください」

りの「せっかく助けにきてあげたのに」

りの、ダイニングテーブル傍の椅子に座る。

翔太「どうしてここがわかったんですか」

りの「それは、ほら。昼間にたくさん書いてもらったじゃないですか」

翔太「お店に連絡しますよ。警察も」

りの「いいですよ」

翔太「いいって。困るのはあなたでしょう」

りの「店は入ったばっかりで退屈だし、警察

に連絡して困るのはあなたですし」

翔太「……僕はなにも困らない」

りの、机の上に置かれたスマホを触る。

りの「そう？奥さんがいなくなったって警察に相談したばっかりなのに、女が家にあがりこんで困ってるって？警察に疑われちゃうよ？こいつ、女絡みで揉めてたのかって。こいつ、不倫してたのかって。不倫してたから奥さんが出て行ったんだって。邪魔だから消したんだって。もしかしなくても容疑者扱いだね。そうなっちゃったら警察はもう真面目に探してくれないよ」

翔太「……あなただって巻き込まれる。不倫相手に間違われるのは面倒だろ」

りの「それはおもしろそうだからいい」

翔太「おもしろいって。ふざけないでください」

りの「ふざけてない。私は本当に純粋に心の底からの善意であなたを助けたいと思ってるんですから」

翔太「タダより怖いものはないって知ってますか？」

りの「あれ。怖がってるんですか？」

翔太「当たり前じゃないですか。唐突に向けられる過剰な善意ほど怖いものはないんですよ。善意っていうのもかなり好意的に受け取ってめちゃくちゃ譲歩した結果の変な言葉ですから」

りの「私としては当然の成り行きなんですけど」

翔太「……いいから帰ってください」

りの「私たちって気が合うと思いません か？」

翔太「帰れって言ったのが聞えませんか？」

りの「私、警察呼びますから」

翔太「……警察？呼びたいのはこっちなんですが。なんで不法侵入してる側のあなたが警察を呼ぶんですか」

りの「無理やりつれてこられたって言います。大騒ぎしますから。奥さんを探すのを邪魔

しますから」

翔太「無茶苦茶だ。そんなことして警察が信じるわけない」

りの、意味深に笑う。

りの「それはどうでしょうね。意外とこういうのってあなたの思ったとおりにはことは運ばないんですよ。私、よく知ってますから、こういうことは」

翔太「……前にもやったことがあるのか。たぶんうまくいってる」

りの「さぁ、どうでしょうね」

翔太、頭を掻く。

りの、立ち上がって翔太の顔を覗き込む。

りの「そんなに心配しなくても私たちって気が合うから大丈夫ですよ」

翔太「気が、合う？」

りの「ほら、モネ」

翔太「モネ？」

りの「ゴッホよりモネが好きって」

翔太「……それだけ？」

りの「ひどーい。それだけなんて。それにこれからたくさん共通点が見つかるんですから」

翔太「帰ってください。お願いですから」

りの「まぁまぁ。気が合うってのもそうですけど、私、本当に奥さんのことが心配でこうやって来たんですよ。ほらほら、現場検証させてください」

りの、リビングから早足で出ていく。

りのの声「え～、こっちもかわいい～」

翔太「勝手にうろつかないでください！」

翔太、りのを追いかけてリビングから出ていく。

美咲の仕事部屋。暗い。電灯が灯る。

仕事の机にはＰＣなどのイラスト作業用の道具。二次元の美少年や美少女たちのイラストが貼ってある。そのスペースとは一線を画して油絵やスケッ

チ。どこかひまわりを連想させる。

りのが入ってくる。

りの「奥さんってイラストレーターさんなんですね」

翔太「勝手に見ないでください！」

りの「え！ジャービスの絵師さんなんですか！私、よくユーチューブで見ますよ。友だちにも大ファンの子がいますもん。すご。売れっ子イラストレーターさんじゃないですか」

翔太「稼いでるらしい」

りの「すごい。有名人なんだ。そういう人に近づくのって初めて。うーん。……、けど本業はこっちだったんですね」

りの、油絵やスケッチの前に座り込んでそれらを眺める。

翔太「いや、そっちは趣味でやってるはず。って、さっさと帰ってくださいよ」

りの、スケッチブックを手に取って立ち上がる。呆れたように翔太を見る。

りの「なに言ってるんですか。こんなにかけてる熱量が違うのに。よく見てくださいよ」

翔太、ため息をつく。

翔太「けど、こっちで金は稼いでるんですよ。なら、そっちが趣味です」

りの「なにもわかってない。こっちの絵の線に魂を感じないんですか。そりゃ、こっちだってめちゃくちゃ上手ですけど、それにしたってこっちのほうが熱が違いますよ。熱が」

翔太「……言われてみればそんな気もしてくるが」

りの「そりゃ出て行っちゃいますよ。なにもかも放り投げてね。いちばん身近な人間にそういう細かな違いをわかってもらえないのがいちばんしんどいですから。そこんとこわかってます？」

ひまわりの絵。

りの、勝手に美咲のＰＣを触りはじめ

る。

りの「パスワードねぇ。えーっと、誕生日とかは？」

翔太「教えるわけない」

りの「さすがにそんなに単純じゃないか。なんか賢そうだし。なんだっけと、あった秘密の質問。……心残りって、陰気ねぇ」

翔太「なにを一人でぶつぶつと」

りの、翔太を見る。

りの「奥さんの心残りに心当たりは？」

翔太「……ないです」

りの「ふーん。えーっと、結婚、は違くて。旅行、も違う。なんだ。あとは、仕事、家庭も違うのか。お子さんはいなそうですよね？子供、出産、子育て、うーん。流産っと。これも違うか」

翔太「あの、そんなに人のプライベートにずかずか踏み込むのどうかと思いますよ」

りの「奥さんのこと本気で探したいんですよね？このくらいしないといけないことくらいわかりますよね？」

翔太「だからって、あなたがそんなことする権利はない。それにふらっと今、この瞬間に返って来る可能性だってある」

りの「本気でそれ信じてますか？自分でも思ってもいないことばっかり言ってるとわからないことだらけになっちゃいますよ」

翔太「……帰って来る」

りの「いいですけど。ＰＣはダメみたいです」

りの、翔太に手を差し出す。

りの「スマホ、貸してください」

翔太「昼間は開けられないって言ってましたよね」

りの「それはお店での話でしょ」

翔太「店の外に出たら、店員の知識をつかっていいわけじゃないだろ」

りの「店員の知識？私、まだ入ったばっかりだからマニュアルないとよくわかんないし。それに、使うのは私の頭だけだから」

翔太「それって勘ってことだろ。なおさら妻のスマホをあんたに預ける必要がない」
りの「本気で探すって話だよね。早ければ早い方がいいでしょ。探してくれる人は多い方がいい」
りの、翔太に手を差し出す。
りの「どうせなにもわかってないんだから」
翔太、りのにスマホを差し出す。
翔太「すぐ、返してくださいよ」
りの、スマホをいじる。
りの「生年月日とかは？」
翔太「いれた」
りの「なさそうだけど、結婚記念日とか？」
翔太「いれた」
りの「０００ｏっと。１１１は？ないか。この辺にしとくか……」
りの、翔太にスマホを返す。翔太、思いの外はやく帰ってきたことに驚きながら受け取る。
りの「この絵とか、スケッチブックとかみてても？」
翔太「好きにしろ……。盗るもんなんてないからな」
りの、物色をはじめている。
りの「恩人を泥棒扱い？ひどーい」
翔太「終わったら教えてくれ。少し休む」
翔太、首を振りながら出ていく。りの、スケッチブックをぱらぱらとめくっている。
翔太、ダイニングでインスタントコーヒーを入れている。りのにも淹れてやるためにニつ目のマグカップに手を伸ばそうとしてやめる。
翔太、椅子に座ってコーヒーを飲む。
翔太、時計に目をやる。１０時くらいを指している。
翔太、マグカップを持って美咲の部屋の入り口にもたれて中を覗く。

りの、物色している。脇にはスケッチブックが積みあがっている。

翔太「あの、そろそろ、本当に帰ってもらえませんか」

りの、振り返る。

りの「いろいろと試したい数字があったの。スマホ。貸して」

りの、翔太に向かって手を差し出す。

翔太、りのにスマホを手渡す。

翔太「これで駄目だったら諦めてください　ね」

りの「はいはい。えーっと、まずはこれ」

りの、脇にあったスケッチブックのうち一冊を手に取る。そして、そこに挟まっている美術館のチケットの半券を二枚取り出す。翔太にチケットを見せる。券面には開催日である１１月２０日の日付。展示会の名前はゴッホ展。大きくデザインとして生まれ年である１８５３年の記載。

りの「まずはこれ。いちばん新しいスケッチブックに挟まってた。結構前の美術展なのに。きっとなんらかの思い入れがあるはず。いっしょにいった？」

翔太「行ったような気もする」

りの、スマホをいじっている。

りの「日付は違うっと……。次は……」

りの、固まってスマホを見つめている。

翔太「どうした」

りの「あなたよりも、ゴッホにご執心だったみたい。１８５３で開いちゃった」

りの、スマホを翔太に見せる。スマホのロックは解除されている。

りの「本当は私が色々見ちゃいたいけど、さすがにね」

りの、翔太にスマホを手渡す。

りの「なにか、わかるといいね」

翔太「……ありがとう」

りの「じゃあ、あとはゆっくり手がかりを探して」

りの、美咲の部屋から出ていく。翔太、それを見送ってスマホをいじりはじめる。

○鈴木家（朝）

家の前には、りのの軽自動車。

ダイニングの壁にはなにもかざられていない。

ダイニングテーブルのうえには、目玉焼き、ウインナー、白米のカフェスタイルのワンプレート。二人分ある。手が二組伸びてきて食事をはじめる。

テーブルの隅には美咲のスマホが置かれている。

翔太、りの、ダイニングテーブルに向かい合って座っている。

翔太「なんで朝飯まで食ってるんだ」

りの「寂しいかなって」

翔太「無茶苦茶だ」

りの「無茶苦茶だって、作ってくれたのはあなたじゃないですか。残すのも馬鹿らしいですよね」

翔太「それはそうなんだが……。こんなところを見られて妻になんて説明したらいいんだ」

りの「いないじゃないですか」

翔太「いつ帰って来るか、わからないだろ」

りの「帰って来るといいですね。それにわたしたちになにもなかったじゃないですか」

翔太「なにもなかった。なにもなかったが、それが通るなら誰とでも旅行でもホテルでも行き放題だ」

りの「確かに。それってめっちゃいい考えじゃないですか。そのアイデアが奥さんにも通るといいですね」

翔太、りのを軽く睨んで食事をする。

りの「それで？なにかわかりましたか？」

翔太「ああ」

りの「すごい。なにがわかったんですか」

翔太「これはスマホじゃない」

りの「スマホじゃない？スマホですよ」
翔太「なにもない」
りの「なにも？」
翔太「人となり、みたいな。温度のある情報がなにもない。これが妻のスマホだとは思えない。なにもないんだ。連絡の履歴とか写真とか動画とか。ＳＮＳもはいってないし。別に誰か別の人のスマホだって言われても驚かない。妻のスマホだって確信が持てる情報が一つもない」
りの「奥さんのことも、あなたのこともなにもはいっていない？」
翔太「ああ」
りの「そういうスマホは珍しいかもね」
翔太「なにかわかるんじゃないかと思ったんだが」
りの「そんなもんでしょ。置いてっちゃうくらいだし」
翔太「こんなに苦労したのになにもわからないなんて」
りの「あなたが奥さんのことをなにも知らないんじゃなくて？」
翔太「……なにも知らないんじゃなくて」
りの「ふーん」
りの、食事を再開する。
インターホンの鳴る音がする。翔太、りの、玄関のほうを見る。
翔太、りの、互いに見合わせる。
翔太「帰ってきた」
翔太、立ち上がって玄関のほうへと駆けていきダイニングから出ていく。りの、食事の手を止めてから大きく息をつく。
白川すみれの声「ちょっとなんで連絡くれないのよ！」
翔太の声「おちつけって。ほら、玄関で話せばいいだろ」
すみれの声「もういいの！はっきりさせるんだから」
翔太の声「待ってって」

すみれ、ダイニングにはいってくる。
すみれ、りのを睨みつける。りの、見つめ返す。
翔太、ダイニングに入ってくる。翔太、にらみ合っている二人に困惑して間で立ち尽くす。
りの・すみれ「奥さん？」
りの、すみれ、翔太の顔を見る。
翔太「……違います」
すみれ「じゃあ誰なのよ！この女！」
すみれ、翔太に詰め寄る。りの、食事を再開する。
翔太「なんというか、説明は非常に難しいんだけれども」
りの「本当に不倫してたとはねぇ」
すみれ「私以外にも女がいたの！最低！」
翔太「おちつけって」
すみれ「この女は家にいれるのに、私はいれてくれなかったのね」
りの「いれてくれたというか、なんというか」
翔太「事情があるんだよ」
すみれ「あんたもなに呑気にしてるの。わたしはこんなに必死なのに」
すみれ、りのに詰め寄る。りの、すみれを見て、翔太を見る。
りの「この子は？」
翔太「職場の後輩」
りの「奥さんにはこのアイデアは通ってるの？」
翔太「通ってるわけないだろ」
すみれ「私の話には答えないくせにこの女には返事とかするんだ！信じられない！」
すみれ、二人に対して怒っている。
りの「奥さんがね」
すみれ「は？」
りの「彼の奥さんが行方不明なの」
すみれ、翔太を見る。翔太、すみれに頷く。
すみれ「そうなの？」

翔太「昨日から」

りの「そこにあなたが来たから怪しいなって」

すみれ「私、関係ない。奥さんには会ったこともないんだから」

りの「そう？警察がみたらあなたってとても怪しく見えるわ」

すみれ、翔太を見る。

すみれ「もしかして、私のために？」

翔太「勘弁してくれ」

すみれ「なによ。本当に私は知らないんだからね。それでこの女は誰なのよ！」

翔太「なんというか、どうというか」

すみれ「奥さんよりたちが悪い！私のことはなんて紹介するのよ！」

翔太「職場の後輩」

すみれ「この女は？」

すみれ、りのを指さす。

翔太「あー、えっと」

すみれ「もう知らない！勝手にすれば！」

すみれ、りのを指さす。

すみれ「私、奥さんのことは本当になんにも知らないから！」

すみれ、ばたばたとダイニングから出ていく。

りの、手を振ってすみれを見送る。翔太、その場に立っている。

りの「賑やかな人ね。追いかけなくていいの？」

翔太「ああ、面倒。どうせ終わる関係だったし。それが今日、このタイミングだったってだけだ」

りの「ずるいことばっかりしてるのね」

翔太「……」

りの「奥さんにはバレてないわけ？」

翔太「……おそらく」

りの「というか、奥さんが失踪している原因というか心当たりなんていくらでもありそう。自分の胸に手を当てて考えたほうが早いんじゃないの？」

翔太「けど、これは唐突すぎる」
りの「すごい自信。どうかしてる」
翔太「けど、いなくなったんだ」
りの「呆れた」
翔太「見つかれば理由は聞ける」
りの「とにかく、あなたとあの子が組んで奥さんをどうこうってわけじゃなさそう」
翔太「どうして」
りの「あんな子をそういうことをするパートナーにするほど頭が悪いの？してるといえばしてるのか」
翔太「……抱えきれなくなって全部話しちゃうタイプだわな」
りの「そういうのが楽に思えるのをわからないでもないけれど」
翔太「軽蔑するか？」
りの「不倫してたことに？ああいうタイプと不倫していたことに？」
翔太「……どっちでもいいが。どう思うんだってこと」
りの「面白いんじゃないの。みんなそういうの好きでしょ。身近にありそうな刺激って感じで。しょうもないとは思うけど」
翔太「まともな感想を言われると思ったより心は閉ざされるな。あんたがやばいやつだと思ってたのに。やばいやつのほうが常識があるなんて」
りの「不倫してる人に言われたくないわ」
翔太「あんたには関係ないだろ」
翔太、座って食事を再開する。
りの「スマホ、触っていい」
翔太、食事しながらジェスチャーで許可を出す。
りの「どうも」
りの、美咲のスマホをとっていじりはじめる。
翔太、立ち上がって冷蔵庫に向かう。
冷蔵庫からソースを取り出す。冷蔵庫には丼に入ったとろろ。翔太、とろろを見てから冷蔵庫をしめる。

翔太、椅子に座って目玉焼きにソースをかける。りの、翔太の様子をじっと見つめている。

翔太「なにかわかりそう？」

りの、翔太を見る。

りの「やっぱり気が合いそう」

翔太「は？」

りの「私もソース派なの」

翔太「そんなのなんとでも言えるだろ」

りの「ここにいくから」

りの、立ち上がって、翔太を急かす。

りの「ほら、急ぐよ」

翔太「なんだ急に」

りの、美咲のスマホの画面を翔太に見せる。スマホの画面には鈴木家から美咲の仕事場までのルートが示されている。仕事場は周囲になにもない辺鄙な場所。

りの「ここに覚えは？」

翔太「……ない」

りの「奥さんはここに通ってたみたい。マップだとなんなのかよくわからない。倉庫みたいな屋根だけれど。別に仕事してたの？」

翔太「いや、イラストの仕事だけで手いっぱいだったはず」

りの「そのへんはよくわからないけど、倒れてるかもしれないでしょ。こんな山奥、一人だったら誰にも気づいてもらえないよ。私たちが行ったほうがはやい」

翔太、りのの発言を理解して慌てて立ち上がる。

翔太、りの、ダイニングから出ていく。

○道路（朝）

りのの軽自動車が山道を走っている。

自然が豊かな場所。

○自動車内（朝）

りの、運転席。翔太、助手席。

翔太「運転までありがとう」
りの「私の車が出しやすいところにあったから」
翔太「なんでそこまで頭が回るんだ。俺だったら絶対に気が付かなかった」
りの「そう？普通じゃない」
翔太「もっとはやく見せておけばよかった。そうすれば昨日の段階で探しに行けたのに」
りの「うーん。でも、あんまりいる可能性が高いとは思えない。万が一が危ないってだけの話で。もっとちゃんといなくなっているような気もするけど」
翔太「……わからないな」
翔太、りの、沈黙。
翔太「とろろ」
りの「え？」
翔太「とろろ」
りの「とろろ？」
翔太「いなくなる前にとろろの話をしてたんだ」
りの「とろろの話」
翔太「朝の忙しい時間で、俺は髭を剃ってた。いつも通りに返事をしたはずだった。気持ちはのってない空返事だったけど。けど、それはいつものことで。いつも通りの朝だった。険悪ってわけでもないし、お互いにいい雰囲気ってわけじゃなくても、悪い雰囲気じゃなかった。突然いなくなったけど」
りの「だから、突然いなくなったって言うのね」
翔太「そう。不自然なんだ。なにもかも。……って、ずっと思っていたんだけど。あんたに、なにも知らなかっただけなんじゃないのって言われてから、俺はずっと迷ってる。俺がこんな感じだったから、いなくなったんじゃないかって」
りの「自分の行動を客観的に見れてるのかなぁって思ってるところで、突然ノスタルジ

ーに浸られるとキモいんだけど」

翔太「……すまん」

翔太、りの、沈黙。

りの「とろろの話って？奥さんはとろろが好きだったの？」

翔太「とろろが、バナナの味がするってそしたらいなくなった」

りの「バナナの味はしなそう」

翔太「俺もそう思う。ただ、そう思ってたからいなくなったのかもしれないって、思うんだ。俺が心のそこから共感できていたらこんなことにはならなかったんじゃないかって」

りの「そういう気分なときってある」

翔太「いや、気分というか本当にそうなんだ。俺がいっしょに食べてどんな味がするか確かめないといけなかった。俺にはそういうことができなかった」

りの「そのとろろは食べてみたの？そしたらそれで解決だろうし、しなかったらそれはそれでコミュニケーションでしょ」

翔太「食べてない。冷蔵庫にある」

りの「確かめたらよかったのに」

翔太「もし本当にバナナの味がしなかったらもう帰って来ないだろ」

りの「ゲン担ぎのつもり？どうかしてる。さっきまであんなにうじうじ気にしてたのにいざそういう段階になると急に嫌がるって」

翔太「……」

翔太、窓の外を眺める。

○倉庫

さびれた倉庫。シャッターが下りている。横には出入り口用の扉。ダイヤル錠がついている。

りのの軽自動車が敷地に入ってくる。そのまま、倉庫の前に停まる。翔太、りの車から降りてくる。

翔太、りの、倉庫のシャッターをガン

ガン叩く。

翔太「美咲。いるか？おい。返事しろ。おい！美咲！」

りの、倉庫の様子を見る。扉に気がついてそちらに向かう。りの、扉を見てダイヤル錠に気がつく。

りの「こっち！鍵がある」

翔太、りのに近づく。翔太、りのの後ろから鍵を覗き込む。

翔太「ダイヤル錠。また四桁か」

りの「外からかけるタイプの鍵だから倒れて閉じ込められたとかはなさそう」

翔太「誰かに閉じ込められてるかもしれないだろ」

翔太、りのからダイヤル錠をとって回す。

翔太「スマホと同じ１８５３はダメか。あとはなんだ……。誕生日とかか」

翔太、ダイヤル錠に思いつく数字を片っ端から試していく。りの、２、３個試したのを見てから翔太から離れる。りの、倉庫のシャッターを見る。あちこちを検分してシャッターを上にあげる。鍵はかかっておらずなんなくシャッターが開く。

翔太、音に気がついてりのと目が合う。りの、顎で中を指す。翔太、ダイヤル錠をおいてシャッターから中に入る。

倉庫内。薄暗い。広いがほぼ物置。作業場として機能しているのは半分くらい。電灯が垂れさがっている。作業場にはイーゼルや油絵具、油や筆、スケッチブックなどが置かれている。基本的なモチーフにはひまわり。物置にはここで書かれたであろう絵が所狭しと置かれている。手前のほうには貸金庫から盗まれたひまわりと同じひまわりがある。

シャッターがバンバン叩かれる音。

翔太の声「美咲。いるか？おい。返事しろ。おい！美咲！」

シャッター、が開く。

翔太、りの、倉庫内に入ってくる。

りの「作業場みたい」

りの、イーゼルの絵を眺める。

翔太「おい！美咲！いるか！」

返事はない。翔太の声だけが響く。りの、倉庫内を歩き回る。

りの「あっち側には人が入る場所はなさそう。いないみたい」

翔太、倉庫内を探しまわる。

翔太「……いないな」

りの「一安心ね。それにしてもすごいところ。秘密基地」

翔太「こんなところ借りてたのか」

りの「作業場兼倉庫ってところかしら」

りの、絵を見ている。

翔太「……知らないことだらけだ」

りの「ねぇ」

りの、翔太に呼びかける。翔太、絵を眺めている。

りの「ねぇってば」

翔太「なに」

りの、その辺りにある絵を翔太に見せる。

りの「これ」

翔太、絵を見るがピンとこない。

翔太「なに」

りの「気がつかない？見覚えあるでしょ？」

翔太「……わからない」

りの、近くにあるひまわりの絵を次々に見せる。

りの「ほら！」

翔太「……」

りの「これ！あの盗まれたひまわりと全くいっしょ！ほら！これも！これも！」

翔太「いっしょか？」

りの「いっしょよ！このひまわりだけ他のひまわりとは全然構図がちがうの！私、職場

の垂れ流しテレビでたくさん見させられたからわかる」

翔太、絵を受け取る。スマホで事件のひまわりを調べて見比べる。

翔太「確かにいっしょか？」

りの「いっしょ」

翔太「けど、だからなんなんだ」

りの「そう言われるとそうなんだけど……」

翔太「新しいひまわりの絵を自分なりに書いてたってだけだろ」

りの「けど、新しいひまわりが公開されてからの期間でこんなクオリティの絵を描けるかな。しかも、かなり古そうに見える」

翔太「才能があるってことだろ。ひまわりをたくさん描いているからって妻がいなくなった理由になるのか」

りの「奥さんがこんなにひまわりに執着してるってことは……」

翔太「盗んだって言いたいのか」

りの「そう」

翔太「バカな。ありえない」

りの「タイミングもばっちりだと思うけど」

翔太「ワイドショーの見すぎだ。刺激をもとめすぎだ」

りの「この絵を見てたらそのくらいしてもおかしくないと思うけど」

翔太、ひまわりの絵を見る。殺気せまるひまわりのタッチ。

銀行の貸金庫に置かれた花瓶に生けられたひまわり。

翔太「だからってどうしろって言うんだ。銀行にいけば妻がいるのか？絵を持ってどこに行ったって言うんだ」

りの「海外に持って逃げちゃったとか」

翔太「……そうなったら、俺にはもうどうしようもない」

翔太、手に持った絵を立てかけて置く。

翔太「行こう」

りの「どこに？」
翔太「とりあえず帰ろう。ここは、空気が悪い。……仕事は？」
りの「コロナってことでしばらく休んでる。こっちのほうが面白そうだし。そっちは？」
翔太「妻がいなくなったって説明して休みをもらってる」
りの「探すの？」
翔太「もちろん。ただ、帰ろう。倒れてなかったそれだけで大収穫だ」
りの「わかった」
りの、倉庫から出ていく。翔太、出て行こうとする。立ち止まってひまわりの絵を一枚持っていく。

○鈴木家
鈴木家外観。りのの軽自動車が敷地内に入ってきてとまる。翔太、りの、自動車から降りてくる。

ダイニング。電灯がつく。ダイニングの壁にはなにもかざられていない。少し明るくなり翔太、りのが入ってくる。翔太、手に持ったひまわりの絵を別の部屋に置きに行く。りの、テーブルに乗った皿を流しに片付ける。翔太、戻ってきて座る。りのが片付けているのを見て声をかける。
翔太「ありがとう」
りの「いいえ～」
りの、座る。お互い一息ついて顔を見合わせる。
翔太「……帰ってくれないか」
りの「いいコンビなのに」
翔太「感謝してる。俺だけじゃここまでわからなかった。けど、やっぱりあんたには関係ない」
りの「……わかった」
りの、立ち上がる。手を翔太に差し出

す。

りの「スマホ貸して」

翔太、美咲のスマホを差し出す。

りの「ううん。あなたのスマホ」

翔太、自分のスマホを渡す。りの、受け取って自分の連絡先を翔太のスマホに入れる。

りの「なにかあったら連絡して」

りの、スマホを翔太に返す。翔太、受けとる。

翔太「ありがとう」

りの、その場から立ち去ろうとして振りかえる。

りの「今度はモネを見にいきましょう」

翔太「……ああ」

りの、微笑んで出ていく。

翔太、りのの背中を見送って椅子に深く座り直す。

○鈴木家（夜）

翔太の乗用車。家の玄関の明かりがともる。翔太が玄関から出てくる。車に乗る。電気をつけて敷地の外へと走り去っていく。

○銀行（朝）

カメラマンや記者などのメディア関係者が銀行の前に張り付いている。わかりやすい立ち入り禁止。

翔太の乗用車が銀行の駐車場に入ってくる。翔太、車から降りてきてメディア関係者の列に向かう。

翔太「すみません」

メディア関係者たち、ざわざわしていて翔太には気がつかない。翔太、近くにいた記者の肩を叩く。

翔太「すみません」

記者「なんですか。ここはマスコミ関係者しか入れないんですよ」

勝手に立ててそうなテント。

翔太「すみません。犯人って誰かわかったりしましたか？」
　記者、怪訝そうな顔で見る。
記者「なにも。わかってたらもっと大騒ぎしてますよ」
翔太「中に入れたりしますか？確かめたいことがあるんです」
記者「入れるわけないじゃないですか」
翔太「あなたってひまわりを直接見ました
か？」
記者「いいえ。誰も見れてないですよ」
　翔太、首を横に振りながらその場を離れる。
　翔太、銀行の入り口に立つ。立ち入り禁止をくぐってドアに近づく。自動ドアを叩く。
翔太「すみません。開けてください」
　中からは応答はない。翔太、変わらず叩き続ける。
刑事の声「ちょっとちょっと。なにしてるの」
　刑事、翔太の背後から声をかける。翔太、振り返って刑事にお辞儀する。
翔太「すみません。ひまわりがみたくて」
刑事「うちは美術館じゃないから」
翔太「どうやったら見れますか？」
刑事「見つかったらじゃないの。まぁ、証拠品だから見れないだろけど」
翔太「飾ってあった生のひまわりは？」
刑事「それも証拠品だから見れないよ」
翔太「犯人の目途って？」
刑事「……、なんなのさっきから。ちょっとお話聞かせてくだいね。ほら、移動するよ」
翔太「は、はい」
　翔太、そのまま刑事に連行されていく。

○駐車場

　駐車場のパトカー内。
翔太、刑事と横並びで座っている。警

察官、ボードを見ている。ボードには翔太から聞き取った個人情報の書かれた紙。

刑事「名前と住所と電話番号は、ばっちりと。免許証とかある？」

翔太、財布を取り出して免許証を渡す。

刑事「ちょっと待ってね」

刑事、免許証を機械で読み取って内容を確認する。

刑事「内容もあってそうね。それで？どうしてこんなところまできたの？」

翔太「事件の詳細が気になってしまって」

刑事「すごい、気合が入ってるね。たしかに連日このニュースばっかりだから。ユーチューバーとかなの？ＳＮＳにあげる？そういうの流行ってるけどね。今も録音していたりする？」

翔太「してないです。どこにもあげたりはしないので。本当にただただ個人的な理由で」

刑事「そうなんだ。ただ、ああいうことするとかなり怪しいからやめたほうがいいよ。あなたもみたことないでしょう。ああいうことしてる人って」

翔太「すみません。……ひまわりって見れませんか」

刑事「すごい熱量だ。ごめんね、関係ない人には見せれないから」

翔太「あの人たちは関係あるんですか？」

翔太、メディア関係者たちを顎で指す。

刑事「そういう慣習だからさ。それに、あの人たちも記者会見の内容くらいしか、この事件で知ってることはないよ。直接見たひとなんていないはず」

翔太「そうなんですね。僕といっしょってことですか？」

刑事「はは。そうだね。ただなんというか慣習的にマスコミには寛大にやってきてる。組織だからかな。個人にはどうするみたいなのはあまり土壌としてないから。すぐに

広められるなら組織力もあまりいらなくはなるんだろうけど。……ごめんごめん。ちょっと脱線しちゃったよ。なんだっけ」

翔太「ひまわりが見れるとすれば、僕にできることってありますか」

刑事「ごめんね。それに関してはないっていうのが一番正しそうかな。僕だってまだ何の見当もついていないし、それにさ、考えてもみてよ。もし仮に見つかったとしてもさ、ここにひまわりが戻ってくると思う？絶対にここには戻さないよね。なら、もしみたいとしてもここでわざわざ張ってるのは無駄な努力みたいな感じがしない？」

翔太「それは、家でじっとしてろってことですか？」

刑事「うん。そうだね。手っ取りばやく言うならそういうことかな。家でワイドショーみてたほうが情報は早いんじゃないかな。そのあとすぐにＳＮＳにも流れるだろうし」

翔太「わかりました。考えます」

刑事「どうして？ひまわりがそんなに好きなの？」

翔太「はい。見れたら人生が変わるような気がして」

刑事「絵じゃなくて花のほうを？どこでも見れるんじゃない？」

翔太「いや、花のほうが見たかったんです」

刑事「もし見れるとするならばだけど、絶対に絵を見たほうがいいって。とか言っても見れないんだけどさ。花なら君の地元にも咲いてるでしょ」

翔太「咲いてます」

刑事「気持ちはわからないではないけどね。とかなんとか言っちゃって。とにかくさ、絵のほうのひまわり探しは警察に任せてよ」

翔太「はい。ご迷惑をおかけして申し訳ないです」

刑事「わかってもらえてうれしいよ。話の通

じる人だとは思ってたけどさ」

翔太「いえ、お手数をおかけしてしまって申し訳ないです」

刑事「全然ですよ。仕事ですから。このあとは帰るの？」

翔太「はい。ここに来ることだけが目的だったので」

刑事「結婚してるんでしょ？奥さん、心配するよ」

翔太「はい。早く帰ってあげないと」

刑事「気をつけてね」

翔太「ありがとうございます」

翔太、刑事の間に沈黙。お互いに顔を見合わせる。

刑事「降りていいよ」

翔太「あ、すみません」

翔太、パトカーから降りる。刑事、ボードに書きこんでいる。

○高速道路

翔太の車が走っていく。

○美咲の実家

小奇麗な一軒家。駐車場に翔太の車が停まっている。翔太、車から降りてくる。

翔太、玄関の前に立ってインターホンを押す。

やや間があって、美咲の母が出てくる。

母「あら、いらっしゃい。まだ美咲は帰って来ない？」

翔太「ええ。こちらにも？」

母「そうね。全然帰ってないわ」

翔太「そうですか」

母「あがっていく？」

翔太「いえ、こちらで大丈夫です」

母「そんなに心配しなくてもふらっと帰ってくるわよ。あの子、そういうところあるし」

翔太「そうだといいです」

母「不満もないでしょ。お金だってあの子自身稼いでるし。翔太さんも稼いでて家事だって上手だしねぇ。料理なんてうちでも作ってくらいたいだもの」

翔太「あはは。ぜひまた遊びにいらしてください」

母「あとは子供のことくらいかしら……。一歳にもならずに亡くなっちゃったのは残念だけれど。立ち直ってるように見えたわよね？」

翔太「……いつも通りだったように見えます」

母「いつまでも落ち込んでてもねぇ。本人以外が言うとなんだか冷たいようだけれど、心配してるのよね。あの子の人生だってあるわけなんだから」

翔太「ええ。早く帰ってきてほしいです。せめて連絡だけでもいれてくれれば」

母「翔太さんもあんまり思い詰めないでね。あの子はああいうところあるから。大学生のころだったかしら。勝手にヨーロッパまで行ってねぇ」

翔太「知りませんでした」

母「あら、言ってなかったかしら。あの子、勝手にヨーロッパに行ったのよ。一か月くらいだったかしら。なにしてたのって聞いたら美術館巡りをしてたって言ってねぇ。勝手にお父さんのクレジットカードを使いまくって大変だったんだから。よくもまぁ人のお金で好き勝手できるわと思ったわ。人のお金だから好き勝手できるとも言えるかもしれないけどねぇ」

翔太「それは随分勝手な」

母「全くよねぇ。ただ、そのあとしばらくしてからすぐに全額帰ってきたわ。現金で。どうやって稼いだんだか。絵ってそんなに儲かるのかしら」

翔太「稼ぐ才能すごいですから。普通に働いてる人からしたら想像もつかない世界ですよ」

母「私もそう思う。突然封筒でばさっと。２００万くらいだったかしら。本物の札束なんてはじめてみたわ」

翔太「変わらないなって思います」

母「そうよ。私ももう驚かないわ。勝手に行って勝手に帰って来るんだから。大丈夫。すぐに帰ってくるわ」

翔太「はい。そんな気もしてきました」

母「本当に上がっていかなくてもいいの？遠かったでしょう？お茶でも飲んでいきなさいよ」

翔太「ええ。そうは言っても、帰って来るかもしれないので。家には誰かいてあげたほうがいいかなって」

母「そうよね。心配は心配よね。無理はしないで。気をつけてね。翔太さんが倒れたら元も子もないんだから」

翔太「すみません。ありがとうございます。なにかわかったら連絡ください。僕もお知らせしますから」

母「わかった。気をつけて」

翔太「ありがとうございます」

翔太、玄関から立ち去る。

翔太の車が出ていくのを母が見送る。

〇高速道路（夜）

高速道路。フロントライトをつけた翔太の車が走っていく。

〇自動車内（夜）

翔太、運転している。ハンドルを握ってまっすぐに前を見ている。ひたすらに運転している。

〇墓地（夜）

ヘッドライトのついた車。

翔太、墓の前に立っている。

翔太、墓、ヘッドライトに照らされている。

○鈴木家（夜）

敷地内にライトをつけた翔太の車が入ってくる。駐車してライトが消える。

翔太、車から降りてくる。

ダイニング。真っ暗。電灯がつく。翔太、ダイニングに入ってくる。

ダイニングの壁にはなにもかざられていない。

翔太、座る。

翔太、スマホを取り出す。翔太、りのやすみれに連絡しようとしてやめる。

しばらく、それを繰り返している。

翔太、スマホを机の上に放り投げる。

翔太、電灯を眺めて、立ち上がる。

美咲の部屋。真っ暗。電灯がつく。ひまわりの絵が立てかけられている。翔太、部屋に入ってくる。

翔太、ＰＣの前に座る。ＰＣの電源をつける。起動を待っている間にひまわりの絵を眺めている。

ＰＣの画面がパスワードを求める画面になっている。

秘密の質問を求める画面。画面には心残りの質問。

翔太「心残りか」

翔太、ひまわりの絵を見る。

翔太、質問の答えを“ひまわり”と入れる。

パソコンのロックが開く。

翔太、頭を抱える。

翔太「マジかよ」

翔太、ＰＣの画面に映っているものに気がつく。

翔太、開いたパソコンの画面を見て、見つめている。

パソコンの画面にはひまわり畑を背景とした翔太と美咲のツーショットが映されている。

翔太、それを見て椅子に座ってくるくると回っている。

○鈴木家（朝）

ダイニング。ダイニングの壁にはなにもかざられていない。

机の上には白米とみそ汁と焼き魚が置かれている。手が伸びてきて翔太、食事をはじめる。

インターホンがなる。翔太、食事をやめて立ち上がる。翔太、ダイニングから出ていく。

玄関ですみれを迎えている音。

翔太、ダイニングに入ってくる。すみれ、その後に続いて入ってくる。

すみれ、テーブルの上の料理を見る。

すみれ「ごめんね。食事中に」

翔太「いや、いいんだ。びっくりした突然来るから」

すみれ「この間は感情的になって飛び出してきちゃったから。ごめんなさい」

翔太「いや、いいんだ。俺も自分勝手すぎた。ごめん」

すみれ「奥さんは……、見つかってないみたいね」

翔太「ああ。まだね」

すみれ「いたらいいなって思ってきたんだけど。見つかりますように。……本当だよ？」

翔太「わかってる。ありがとう。……食べていく？」

すみれ「ううん。いいの、すぐ帰るし」

翔太「どうした……って言うのも変か。どうかしてるわけだし」

すみれ「そうだね。どうかしてる」

翔太「……」

すみれ「私、もうあなたとは会わないから」

翔太、すみれを見る。

すみれ「そんなに嬉しそうな顔しないでくれる？」

翔太「そんなつもりはない」
すみれ「けど！会社は絶対に辞めないから。辞めるならあなたが辞めてね」
翔太「わかった」
すみれ「私も私がいちばん大事だから。ごたごたに巻き込まれるのはごめん」
翔太「うん」
すみれ「奥さんがいなくなっちゃったのって、私のせいだと思う？」
翔太「いや、それはない」
すみれ「あなたのせいだと思う？」
翔太「……それはそうだと思う」
すみれ「私はそうは思わないわ。あなたなんかに誰も傷つけることなんてできないんだから。奥さんだって、あの変な女だって、私だって。あなたはただ自分がいちばん大事で、自分のことしか考えられてない、そういう人。自分しかいないの。そういう人に、自分の世界に自分しかいない人に、他人をどうこうすることなんて絶対にできないんだから」
翔太「最近、なんとなくわかるような気もする」
すみれ「私とあなたは似てると思う」
翔太「……誰かにも言われたな」
すみれ「……あなたも私といっしょ。自分がいちばんかわいくて、自分がいちばん大切。そうでしょう？だから、みんな、あなたの元からいなくなる。あなたの元には誰一人として残らない。私もひとり、あなたもひとり。……誰も帰ってこない」
翔太「そんな顔して言うことかよ」
すみれ「見つかるといいね。本当よ。そのほうがあなたは幸せだろうから。奥さんが幸せかどうかは本当に怪しいけど。……私は奥さんに見つかる前に消えちゃうから。じゃあね」
翔太「ああ。……じゃあね」
すみれ、ダイニングから出て行こうとする。翔太、その背中に声をかける。

翔太「飯、やっぱり、食わないか」
すみれ、振り向かずに答える。
すみれ「いらないって言ってるじゃん」
すみれ、そのままダイニングから出ていく。
翔太、それを見送ってテーブルにつく。
食事を再開しようとしたところで、またインターホンがなる。
翔太、立ち上がってダイニングから出ていく。
翔太、ダイニングに入ってくる。りの、その後ろに続いて入ってくる。
りの「人のこと呼びつけておいて自分は不倫相手とお楽しみってわけ？どういう神経してるのよ」
翔太「……勝手に来たんだ。約束したわけじゃないんだから仕方ないだろ」
りの「神妙な顔して出て行ったわよ。ちゃんとフォローしてあげてるの？大爆発しちゃうわよ」
翔太「もう大丈夫。たぶん」
りの「本当に信用ならないわね」
翔太「俺だって、俺のことは信用ならないよ」
りの「おいしそう」
りの、テーブルの朝食を見ながらいう。
翔太「食べる？」
りの「うん」
りの、テーブルに座る。翔太、白米をよそって、味噌汁をよそって目の前に置く。りの、決して手をつけない。
りの「ありがとう」
翔太「魚は？」
りの「貰おうかな」
翔太、冷蔵庫から魚を取り出す。となりにはとろろの入った丼。翔太、少しその丼を眺めるが取り出さない。フライパンで焼き始める。
翔太「ちょっと待ってな」
りの「それで？用は？」

翔太、焼きながら答える。
翔太「パソコンの秘密の質問が、ひまわりだった」
りの「心残りってこと？」
翔太「ああ」
りの「なんだ、不倫とか絶対殺すとかじゃなかったんだ」
翔太「……ああ」
りの「どういう意味なんだろ」
翔太「妻がひまわりを盗ったのかもしれない」
りの「あんなに否定してたのに」
翔太「かもしれないじゃない。盗った」
りの「決まりなの？」
翔太「あんたに言われたとおり、絵を見た。そしたらあれは盗る。熱のある線だ。ほかの人の偽物の線じゃない。あれは、ゴッホの線だ」
りの「本物だから盗る、か。変な理屈」
翔太「あれは彼女の絵だって思える」
りの「けど、それがどうして心の残りだったのかしら。そこまで描けたら満足しそうなものだけど」
翔太「それは、……本人に聞いてみないとわからない」
りの「パソコンはなにかわかった？」
翔太「スマホより人間だった」
りの「例えば？」
翔太「スクリーンが俺と彼女のツーショットだった」
りの「のろけ？」
翔太「いや、背景がひまわり畑だった」
りの「絵よりもそっちが心残りって可能性は？」
翔太「いやない。わかるだろ」
りの「冷めきってたってこと？」
翔太「絵に懸ける情熱ってこと」
りの「はいはい。思い出の場所？」
翔太「俺の地元。結婚の挨拶で帰ったときに見て回ったんだ」

りの「焦げてない？」

翔太「心配ない」

りの「だからなにって話だけどさ。そういう写真を背景にするのって憧れるよね。私はなんだか、恥ずかしくなっちゃうタイプだから。大事なものに慣れちゃうって嫌なことじゃない？かといって、たまに見返すっていうのも変な感じだし。本当に大事ならずっと見てたいってのもそうなんだろうし。そういう刺激？みたいなものって慣れちゃったら刺激じゃなくなっちゃうだろうし、刺激が得られないなら意味なんてなくないって思うし」

翔太「わからん。美咲はずっと見てたいタイプなのかもしれないし。それか、変えるのが面倒なだけだったのかもしれないし」

りの「自信持ちなって～」

翔太「真面目にやってんの。ニュース見てる？」

りの「進展はありません！持ち主がカンカンな動画はめちゃくちゃ見たけど」

翔太「持ち主って買っただけだろ」

りの「持ち主ってそういうものでは」

翔太「俺は彼女が持っているべきだと思った」

りの「引くわ。あんたが盗ったんじゃない？」

翔太「そういう度胸があるタイプじゃないから」

りの「そういう度胸はなさそう」

翔太「できた」

翔太、平皿を取り出して魚を乗せる。

皿をりのの前に置く。

りの「ありがとう」

翔太、座る。

りの、食事には手を決してつけない。

りの「用って報告だったの？」

翔太「いや。あんたが合ってたなって。ありがとう」

りの「それだけ？暇じゃないんだけど」

翔太「暇って言ってたろ。……教えてほしいんだ」

りの「まだなにかあったの」

翔太「妻は見つかってないだろ。見当もつかない。教えてくれよ」

りの「自分で考えなよ。その、ひまわり畑とかにいるんじゃない？」

翔太「頼むよ。わからないんだ。あと、フォルダにも四桁のパスワードがかかってる。そっちも考えてほしい」

りの「私だって全部わかるわけじゃない」

翔太「けど、今までのは合ってた」

りの「適当言ってただけだって。食べなよ」

翔太、食事を再開する。

翔太「頼むよ」

りの「人のパソコンとか勝手に覗くのどうかと思うよ。見られたくないフォルダの２、３個あるでしょ」

翔太「散々覗いてたくせによく言うよ。なんで頼まれたら渋るんだ」

りの「女心？」

翔太「適当なこと言いやがって。そのフォルダ。俺宛てなんだ。俺に美咲が残したフォルダだ」

りの「じゃあ、もう知ってるんじゃないの？」

翔太「は？」

りの「あなた宛てってことは、あなたはそのパスワードを知ってるって思ってる」

翔太「そんなもんか」

りの「そう。……けど、よかったね。そこまで準備してるなら計画的にいなくなってるよ。無事なんじゃない？」

翔太「遺言みたいな可能性だってあるだろ」

りの「その可能性を想定してなにかいいことがある？そうなったときに考えなよ」

翔太「心の準備みたいなものが」

りの「そんな準備する必要ないでしょ」

翔太「……俺がもう知っているパスワード。四桁の数字。もう大概試したと思うんだけ

ど」

りの「奥さんはそうは思ってないね。あなたなら絶対にわかると思ってる。……それか、まぁ、嫌がらせ？相当嫌われてる可能性もあるけど。これもさっきと一緒ね。この可能性を想定していいことある？って感じ」

翔太、考え込んでしまう。

りの、結局魚には手を付けずに、食事を終える。

りの「ごちそうさま」

翔太、りののことを見る。りの、立ち上がる。

りの「私にできることはないよ。悪いけど」

翔太「急に興味なくしたな」

りの「だいたいわかっちゃったし。大丈夫大丈夫。なんとかなるよ。大丈夫。ほら、ご飯食べなよ。燃料がないと体は動かないよ。奥さん探すんってならなおさら。大仕事でしょ～」

翔太「適当だな」

りの「ほら、私ってそういうところあるから」

翔太「ありがとう」

りの「そういうことが言えるなら大丈夫でしょ」

翔太「あんたがいなかったらなにもわからなかった。ありがとう」

りの「はいはい。それじゃ。がんばれ～」

りの、ひらひらと手を振ってダイニングから出ていく。翔太、りのの背中を見つめる。

ダイニングの壁にはなにもかざられていない。

翔太、食事を再開する。りのの残した魚も自分の側に引き寄せてそれも含めて完食する。

美咲の部屋。机の前には翔太が座っている。ＰＣの電源はついており、モニターが光っている。画面の中央には

“翔太へ”と書かれたフォルダが置かれている。

翔太、フォルダをクリックする。パスワードを要求される。

翔太「俺は、答えをしっている」

翔太、椅子に座ったままくるくると回る。

翔太「けど、わからない」

翔太、座ったまま天井を見上げる。

部屋には翔太ひとりだけ。

翔太、頭を抱えて机に突っ伏す。

翔太、“３０６９”とゆっくり入力する。パスワードは解除される。

翔太、頭を掻きむしって立ち上がる。

翔太、座り直してから再度画面に向き合う。

フォルダには写真が格納されている。何枚もある写真は美術品。全て美術館に飾られている。油絵だけでなく版画やクロッキーや彫刻などありとあらゆる形式の美術品が写真に収められている。美術品の解説のところに書いてある名前は全て別人の名前。翔太、枚数がある写真を丁寧に見直していく。

翔太「……全部、美咲の作品だ」

翔太、椅子に深くもたれる。

翔太、ダイニングの冷蔵庫からとろろの入ったどんぶりを取り出す。

翔太、机の上にどんぶりを置く。しばらく、眺めてから箸を取ってくる。翔太、座る。

丼に入ったとろろ。若干茶色。

翔太、丼のとろろを眺める。

翔太、勢いよくとろろを食べ始める。

半分くらい食べたところで丼を置く。

翔太「このとろろ、バナナの味がするよ」

翔太、とろろを食べるのを再開する。

○美術館

無骨な美術館。翔太、常設展を見て回っている。人気はない。
彫刻のコーナー。翔太、他の作品には目もくれずにまっすぐに歩いていく。
翔太、彫刻の前で立ち止まる。目の前の彫刻は、ＰＣで見ていた写真と全く同じ彫刻。翔太、それに見入っている。
人気はあまりない美術館。
翔太、体勢を変えながら長時間彫刻の前で眺めている。

○カフェ

美術館に併設されているカフェ。翔太、コーヒーを飲みながら図録を眺めている。すぐ隣の席で美術館の客、コーヒーを飲んでいる。
美術館の客「めずらしいね」
翔太、自分が話しかけられていることには気がついていない。
客「めずらしいね」
翔太、ようやく気が付いて客のほうを見る。
翔太「はい？」
客「めずらしいね」
翔太「めずらしい？」
客「こんな田舎の美術館に。しかも、企画展と企画展の間。なんにも見に来るような理由ないでしょ」
翔太「企画展はおもしろいのが来ますか？」
客「いや、来ない。だから、なおさら気になるね」
翔太「それはあなたも同じでしょう？」
客「それは、ほら、家が近所だから。ただ憩いの場だよ。コーヒーブレイク。こんなさびれた美術館なんて。いつもは貸し切りだからさ。ちょっと気になっちゃって」
翔太「そんなものですかね。おしゃれだと思いますよ。さびれた美術館でコーヒーブレイクって。僕はちょっと見たい作品があったので。遠かったんですけど」

客「そんな珍しいものがあったかな。常設展は大概専門家みたいになったと思ったけど」

翔太、図録を見せる。

翔太「これです。妻がつくった作品なので」

客「おお、それはすごい」

客、図録を覗き込む。客の顔がすぐに戸惑いの色になる。

客「これは、ピカソだね」

翔太「いえ、妻のです」

客「ははは、それはいいね。君にはユーモアの才能があるみたいだ」

翔太、笑わない。

客「そもそも、ここには君と結婚するような年齢層の人の作品は置いてないはずだけれど」

翔太「けど、妻の作品なんです」

客「うーん。晩年の適当に見える作品だけど、ピカソのだよ。ほら、図録にもそう書いてあるし」

翔太「これが間違っています」

客、ゆっくりとコーヒーを飲む。すっかり飲み干してしまってカップをテーブルに置く。

客「ああ、……そうか。ゆっくりしていきなよ。ここはいい街だから。温泉とかいいよ。のんびりするにはうってつけの街だ。静かでなにもない」

客、立ち上がる。

翔太「ありがとうございます。ただ、このあと行かないといけないところがあるので。今度、妻とまた来ます」

客「そうかい。楽しんでね。奥さんにもよろしく言っておいてね」

翔太「ありがとうございます」

客、足早にそこから立ち去る。

翔太、客を見送って再び図録に目を落とす。

○飛行機

翔太、飛行機から窓の外を眺めている。
国内線。格安。

○空港

空港の正面玄関。ヤシの木が揺れており、ブーゲンビリアが咲いている。
翔太、正面玄関から出てくる。
正面のタクシー場には数台停まっている。
翔太、先頭のタクシーを拾い乗り込む。
タクシー運転手「どちらまで」
翔太「ひまわり畑まで」
運転手「ひまわり畑？それってあの最近流行ってるやつですか？写真とか、ＳＮＳとか」
翔太「そうです。あの、九楽町の、春まではキャベツ畑で、夏になると一面ひまわり畑になる」
運転手「なるほどなるほど。ここからだとかなりありますけど、大丈夫ですか？電車とかのほうがいいんじゃないですか？」
翔太「ええ」
運転手「五万くらいしますよ？」
翔太「かまいません。大丈夫です。あ、運転手さんは大丈夫ですか？遠いですが」
運転手「私は構いませんが。いいんですね？」
翔太「すみません。お願いします」
運転手「それじゃあ、出しますね」

タクシー、出発。タクシー、走っている。

運転手「あの、失礼なことをお聞きしてもいいですか？」
翔太「なんでしょう」
運転手「ああいうところってなんというか、浮かれた人たちが行くところで、一人で行く場所じゃないような気がしまして……なにかお仕事とかですか？」

翔太「いえ、完全にプライベートです」
運転手「ひまわり、いいですよ。私も行ったことあるんですが、一面がひまわりで壮観ですよ。黄色い海といいますか」
翔太「楽しみです。気に入ったひまわりが何本か見つかるといいです」
運転手「数本？景色じゃなくてですか」
翔太「ああ。はい。たぶん、一本ずつ見る気分なので」
運転手「そういう見方もあるんですね。素敵です」
翔太「ありがとうございます。……妻が待っているので」

タクシー、道を快調に飛ばす

○ひまわり畑

タクシー、駐車場に入ってくる。翔太、降りてくる。
翔太、歩いてひまわり畑に向かう。
一面がひまわり畑になっている。翔太、歩いていく。
ひまわりは背が高くてなかなか周りが見えずどこに行くのかもわからない。
しばらく歩いて開けたところへと出てくる。
開けたところの奥にはパラソルが立てられているのが見える。
パラソルの下には美咲の後ろ姿。イーゼルが立てられていてひまわりの絵を描いている。
翔太、それを見つけて立ち止まる。美咲の後ろ姿。
翔太、美咲に近づく。美咲の後ろ姿のすぐ後ろで立ち止まる。美咲、決して振り返らずに絵を描き続けている。
翔太、美咲に話かける。
翔太「……なぁ」
美咲、決して振り返らずに絵を描く。
翔太「なぁ、久しぶり」

美咲、筆が止まる。振り返らない。

美咲「久しぶり」

美咲、絵を描くのを再開する。

翔太「暑くないか」

美咲「うん。パラソルの下は風が気持ちいいよ」

翔太「……たくさん、話すことを考えてきたんだけど、なにから話していいかわからなくなるな」

美咲「大袈裟。好きに話せばいいのに」

翔太「美咲って絵がうまいんだな」

美咲「なによ。急に」

翔太「いや、陶芸とか彫刻とかもか。みんな、本物だと思ってる」

美咲「なんだ。わかったんだ。そこまでわかってるなんて。意外とよく見てるんだね。興味ないと思ってたけど」

翔太「ずっと贋作をつくってたのか。若いころから羽振りがよかったのもそのおかげ？」

美咲「まぁ。つくったものがよく売れたってのはそうね。ほとんど満足いく出来だったけど。作品が先、お金は後。本当よ？作りたくて作りたくて仕方なかったの。それを高く買い取ってくれる人がいただけ。需要と供給があった。商売ってそういうことよね？」

翔太「ああ。あれは創ろうと思って創れるものじゃない。一個は実際に見てきたんだ。俺なんかじゃ全くわからないよ」

美咲「あら、珍しい。美術館とか興味なかったのに。いっしょに行ったゴッホだって微妙な反応だったわ」

翔太「君を探してるうちに色々と、俺にだって変化はある」

美咲「いいことね」

翔太「そう思うよ。……ひまわりの絵を盗んだのは君か？」

美咲「そう」

翔太「なんでだ。……あれを描いたのも君な

んだろ？」

美咲「それも知ってるんだ。そうだよ。あれは私が描いた」

翔太「大ニュースになってる。なんでうまくいくんだ」

美咲「意外となんとかなった。貸金庫ってちょろいのよ」

翔太「そんなバカな」

美咲「けど、うまくいったんだもの」

翔太「よくやるよ。それで、なんで盗む必要があったんだ。ひまわりだけ。他のやつはほったらかしじゃないか。昨日見たピカソの彫刻はなんで盗まないんだ」

美咲「うーん。そんなに難しい話じゃないの。あれは完成する前に本物になっちゃったから。納得いってないのよね。しかも、大々的に宣伝してたでしょう。私、恥ずかしくって恥ずかしくって。あんなの世に出すべきじゃなかった。個人のものになるならなおさらね。永遠に本物になっちゃうから」

翔太「盗んだ絵は？」

美咲「倉庫に置いてきた」

翔太「あれ、本物だったのか。……本物というか偽物というか」

美咲「あれ、倉庫にも行ったの。すごいね」

翔太「シャッター、鍵、開けっ放し」

美咲「ありゃ。よくやっちゃうのよね。大したものおいてないけど」

翔太「何百億の絵があるだろ……」

美咲「本物だとしたらね」

翔太「ややこしいんだよ」

美咲「けど、大した出来じゃないから。あれなら、花を飾ってたほうがずっとましね」

翔太「今、書き直してるのか」

美咲「これはまだだね。ひまわりを描いてるだけ。もっとよくなったら、あの絵に挑戦してもいいかなとは思ってるけど」

翔太「すごいな」

美咲「すごくはない」

翔太「……とろろ、バナナ味だった」

美咲、翔太のほうへ振り向く。

美咲「……そうでしょ」

翔太「ああ。バナナだった」

美咲「バナナだよね」

翔太「うん」

美咲、立ち上がって大きく伸びをする。

美咲「休憩にするけど。コーヒーでも飲む？」

翔太「うん」

美咲「かなり歩くけど」

翔太「かまわない」

美咲、翔太の隣に並んで歩く。翔太、それに続く。翔太、美咲、翔太がやってきた道を帰っていく。

翔太「なぁ、どうやって絵なんて盗むんだ。完全犯罪だろ。世紀の大泥棒だ。みんな、あのニュースの話ばっかりだ」

美咲「まだ捕まらないって決まったわけじゃないよ。それにあの絵の作者は私なんだから」

翔太「うまく盗り返したじゃないか。教えてくれよ」

美咲「まずはあれにそっくりな絵を用意するでしょ。できるだけそっくりなほうがいいわね」

翔太「そこからがいきなりハードル高いんだよな」

翔太、美咲、互いに笑い合う。

広大なひまわり畑。

○鈴木家（朝）

翔太、洗面台で髭を剃っている。

ダイニングテーブルには、翔太と美咲の財布とスマホがそれぞれセットで置かれている。

ダイニングテーブルの中央には洋食の朝食。トーストにサラダ。ヨーグルトにはバナナが入っている。

美咲、座って朝食をとっている。

翔太、髭を剃っている。

美咲の声「ねぇ。ヨーグルトと醤油って合うかな」

翔太「うーん、やめといたら？」

美咲の返答はない。翔太、不安になりながらダイニングに向かう。

美咲、醤油のかかったヨーグルトを食べている。

翔太「どう？」

美咲「わからない」

翔太「おいしいの？」

美咲「わからない」

翔太「慣れ？」

美咲「それだ。醤油ってなんにでも合うから毎日食べてればおいしくなる」

翔太「そんなに万能調味料か？」

美咲「結局最後は醤油に行きつくでしょ。ラーメンもオムライスもチーズケーキもアイスもマカロンもさ」

翔太「本当になんでも試してるな」

美咲「本当においしいんだから。……顔洗ってきなよ。泡だらけだよ」

翔太「うん」

翔太、洗面所に戻る。

ダイニングのいままでなにも飾られていなかった壁にはひまわりの絵が飾ってある。

〈了〉